

古文辞派の琴

高橋博巳

1

荻生徂徠（一六六六―一七二八）には『琴学大意抄』や『幽蘭譜抄』というような著述があるように、琴への関心は並大抵ではなかった。演奏にも手を染めたいが、詳細は不明のようだ¹。とはいえ素通りするわけにもいかず、徂徠の音楽論については差し当たり、拙稿「琴士の系譜―鈴木修敬・村井琴山・浦上玉堂―」（『近世日本と楽の諸相』京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、二〇一九年）の1を参照されたい。

2

そこで、ここでは学派周辺の詩人たちの作品中に、琴の調べを探ることにしたい。まずは万庵原資（一六六八―一七三九）から。この臨濟の禅僧は芝の東禅寺に住して、詩集は『解脱集』と『江陵集』が伝わっている。前者は生前に刊行され、後者は松下烏石（一七〇〇―七九）によって没後に刊行された。

『解脱集』巻一には、「寂師と題を分ち、離夜聴琴を賦し得たり」の作が収まる。

別酒 綢繆の夜
瑶琴 燭下に弾ず
孤心 悲隻鳳
兩淚 墮離鸞

別酒 綢繆の夜
瑶琴 燭下に弾ず
孤心 隻鳳を悲しみ
兩淚 離鸞に墮つ

月映朱絃白
風回宝柱寒
一盃還一曲
星斗已闌干

月は朱絃に映えて白く
風は宝柱を回して寒し
一盃還た一曲
星斗已に闌干

（崇文院、一九二九年）

「寂師」はこの二つ前の詩に、「寂庵師を邀えて楓を看る」と題されておると同一人物であろう。「離夜」は別れの夜。「別酒」は別れの酒宴。「綢繆」は纏綿たる思い、深い友情。「孤心」は孤独な心。「隻鳳」片割れの鳳。「兩淚」は両眼の涙。「孤」と「兩」の対句がよく効いている。「離鸞」は偶を失った鳳で、琴曲の名でもある。「朱絃」は朱の琴糸。「宝柱」は琴柱。「一盃還た一曲」は、交互に飲酒と弾琴をくり返すこと。「星斗」は星。これが題詠にしても、「瑶琴 燭下に弾ず」とあるからには、実際に演奏したものと考えられる。題に「聴琴」とあるので、万庵は聞き役にまわったのであろう。

また「隠士を訪う」には、こうある。

獨訪青谿客
行吟招隱詩
雲深迷處所
花發識栖遲

獨り青溪の客を訪い
行吟す 招隱の詩
雲は深く 処所に迷い
花は発いて 栖遲を識る

山陰落日時
山陰落日時

彈琴迎月色 琴を弾じて月色を迎え
留客宿茅茨 客を留めて茅茨に宿らしむ

（同上、卷七）

これまた一読、絵のような描写で現実感はあまりない。「青溪」は青色を帯びた谷川。郭璞の「遊仙詩」には、「青溪千余仞、中に一道士有り」（七首の其二、『文選（詩篇）』）（二）岩波文庫）と見える。「招隱の詩」は、『楚辞』の「招隱士」以来詠み継がれてきた。「処所」は居場所。「栖遲」は世を逃れて安らぐこと。「茅茨」は、茅葺きの家。しかし、これも実際に隠者を訪れたわけではないだろう。

『江陵集』卷一の冒頭の詩は「感遇」と題され、詩人の本音が聞かれる。

孤生無歡樂 孤生 歡樂無し
寓目偏蕭森 目を寓して偏えに蕭森
風雨驚臯樹 風雨 臯樹を驚かす
聞之慰素襟 之を聞いて素襟を慰す
託志希夷境 志を希夷の境に託し
棲神翰墨林 神を翰墨の林に棲ましむ
惜無鍾子侶 惜しむらくは鍾子が侶の
堪鼓伯牙琴 伯牙が琴を鼓するに堪えたる無きことを
覆衾成異夢 衾を覆いて異夢を成し
峽裡碧桃深 峽裡 碧桃深し
隔雲彈仙璫 雲を隔てて仙璫を弾ず
聲如雄風吟 声は雄風の吟ずるが如し
溪邃未能渡 溪邃くして未だ渡ること能わず
一犬吠花陰 一犬 花陰に吠ゆ

（『江陵詩集』延享二年刊）

「孤生」孤独な人生に「歡樂無し」とは、また暗い始まりである。こうなると、見るものはすべて「蕭森」薄暗く寂しい様子にならざるを得ない。「臯樹」は高木。「素襟」は、ありのままの心。「志」を遊ばせるのは、「希夷の境」すなわち聴覚や視覚では捉えられない奥深い道理の世界。「之を視れども見えざる、名づけて夷と曰う。之を聴けども聞こえざる、名づけて希と曰う」（小川環樹訳注『老子』第十四章、中公文庫）。また「神」を寄せるのは、「翰墨の林」すなわち文人や学者の仲間に対してで、これらはかなり高踏的な世界である。となると、伯牙・鍾子期のような理想的な関係を結ぶのは容易でない。同床異夢は避けがたく、「碧桃」仙人の食べる果実も深く鎖されている。「仙璫」古代の楽器（あるいは琴だろうか）を演奏すれば、「雄風」威風が響くようだ。そして末句は、万庵の志がまだ実現していないことを示している。

ところで『江陵集』卷二の「和文緯」（文緯に和す）には、こう詠まれている。

自有無生曲 自ら無生の曲有り
希聲匣玉琴 希声 玉琴を匣す
浮雲非外物 浮雲 外物に非ず
片月即吾心 片月即ち吾が心
暗艸飛螢絶 暗艸 飛螢絶え
寒階墜葉深 寒階 墜葉深し
恰君能領會 恰む君が能く領會すること
燭影耿巖陰 燭影 岩陰に耿たり

「無生の曲」は不滅の名曲。「希声」は、かすかな声。「大いなる音楽はかすかな響きしかしない」（小川環樹訳注『老子』第四十一章）と

いう。「匣す」は玉琴のなかに閉じこめること。「浮雲」は、実効のない当てのないものが、「外」にあるのではないという厳しい認識。「片月」は片割れ月で、不完全なもの。それが「吾が心」だというのである。「飛螢」は微かな光明で、それさえもなく、「寒階」寒々とした階段には「墜葉」落ち葉がうずたかい。そういった世界の事情を「文緯」はよく理解しているとして、「怜む」いつくしむというのである。そのような、おそらく若い人がいることが、「燭影」火影が「岩陰」に明るく輝いているという比喩の示すところである。

また「對雪有作」(雪に対して作有り)には、こうある。

暮色 江湖光動搖

暮色 江湖光は動揺し

歳華彫盡雪花飄

歳華彫り尽して雪花飄ひらえる

珠宮映出雲中色

珠宮映し出だす雲中の色

白雁飛來海上消

白雁飛び來たりて海上に消ず

梁苑何人翻郢調

梁苑何人か郢調えいじょうを翻し

漢軍今夜逐天驕

漢軍今夜天驕を逐う

山陰縦有鳴琴興

山陰縦い鳴琴の興有るとも

誰向空門蕩畫橈

誰か空門に向かいて画橈を蕩せん

「暮色」は夕暮れの景色。「江湖」は自然のなか。「歳華」は光陰、としつき。「雪花」は雪を花にたとえる。「珠宮」は道院。「白雁」は雁に似た白い渡り鳥。「梁苑」は漢代に梁の孝王の造った庭園。一流の文学者が集まったという。「郢調」は楚の俗曲の調べ。それを「翻す」とは高雅な曲に転ずること。「漢軍」は匈奴と戦った漢の軍隊。「天驕」は匈奴のこと。「山陰」にはあの王徽之(字子猷)がいた。雪も止んで、月の明るい夜、酒を飲みながら左思の招隱詩を口ずさんでいると、戴逵(字安道)を思い出し、夜通し小舟に乗って訪ねたものの、門前で

気が変わり引き返した。その理由を問われた子猷の答えが、「本と興に乗じて行き、興尽きて反る。何ぞ必ずしも安道を見んや」(子猷尋戴)、「蒙求」(卷上)だった。戴逵は隱者の善琴者である(戴逵破琴)、「同上、卷中」。それを伝え聞いた武陵王が使いを寄こすと、戴逵は琴を壊して、「戴安道、王門の伶人と為らず」と言い放ったという。そういう気骨の人だった。「鳴琴の興」には、そうしたことまでが含まれよう。「空門」はふつうは仏門であるが、ここは「門に造りて前すすまずして反る」(子猷尋戴)とあるように、せっかく着いた門をくぐらなかつたので「空」すなわち空しいというのであるが、そういったことを「誰」がするだろうか、子猷の風流に賛成しているのである。「画橈」は舟を漕ぐ櫂。「蕩」は動かすこと。

『江陵集』卷四の最後の詩には、「終期將に至らんとす。自書して烏石山人に贈る」と題して、こう詠んでいる。「終期」は臨終のときで、文字通り、白鳥の歌である。

囑君千古意

君に囑す千古の意

今日絶絃時

今日絶絃の時

天地蒼茫裡

天地蒼茫の裡

江陵一部詩

江陵一部の詩

「囑」は頼むこと。「千古」は永遠の別れ。死別。承句の「今日、絶絃の時」が、烏石ならずとも胸に迫る。「蒼茫」は薄暗いこと。潘岳の「永逝を哀しむ文」には、「天日を視れば蒼茫たり」(『文選』卷五十七)とある。烏石がこれを受けて、「輯校」して出版したのが延享二年(一七四五)だった。

万庵と並んで、古文辞派の詩人として知られるのは、大潮元皓（一六七八〜一七六八）である。これまで大潮をことさら琴に関係づけて見たことはなかったが、『松浦詩集』巻上にこう詠まれているのを見れば、あるいは琴人だったかもしれない。²⁾

初夏幽莊分韻声字（初夏幽莊韻声字を分つ）

南野隣幽獨 南野 幽独を憐れむ

吾廬傍故城 吾が廬 故城に傍る

涼雲梅子嫩 涼雲 梅子嫩く

夜雨竹孫生 夜雨 竹孫生ず

昨夢留春草 昨夢 春草を留め

古琴間雪聲 古琴 雪声を間ゆ

依然高臥足 依然として 高臥足る

猶見晋人情 猶お晋人の情を見るがごとし

「幽独」は独りでいること。「梅子」は梅の実。「竹孫」は竹根の端にはえる竹。「春草」は若草。「古琴」は古代の琴。「雪声」は雪の降る音。むろん幻聴である。「高臥」は志を高尙にして世を避けて暮らすこと。陶淵明に、「北窓の下に高臥し、羲皇上の人と謂えり」（『晋書』隱逸伝）の句がある。「晋人の情」は、淵明のそれを指す。

大潮は江戸滞在中、徂徠をはじめ周辺の人々と盛んに交流し、ことに文人大名と親しく往来したうちの一首は、次のようなものである。

和西臺侯暮春携琴酒泛舟芝江之作（西台侯 暮春 琴酒を携えて 舟を芝江に泛かぶるの作に和す）

鏗爾鳴琴在 鏗爾として 鳴琴在り

悠然蘭棹浮 悠然として 蘭棹浮かぶ

長橋迎綠樹 長橋 綠樹を迎え

遠岸出朱樓 遠岸 朱樓を出だす

化鶴能無客 鶴と化して 能く客無からんや

乘槎若有秋 槎に乗ずる 若しくは 秋有り

不知漁唱外 知らず 漁唱の外

何處著春愁 何の処にか 春愁を著けん

（同上）

「西台侯」は河内西台の藩主、本多猗蘭（一六九一〜一七五七）で、徂徠に師事して詩文書画に通じていた。のち伊勢神戸藩主に転じ、若年寄を勤めた。享保九年には、奏者番兼寺社奉行となっている（平石直昭『荻生徂徠年譜考』平凡社、一九八四年）。「鏗爾」は琴などを下に置くときの音の形容。「蘭棹」は木蘭で作った舟の櫂。「朱樓」は朱塗りのうてな。「化鶴」は世を去るたとえ。「槎」は筏。「道行われず、桴に乗りて海に浮かばん」（『論語』公冶長篇）といった孔子の言葉が想起される。「漁唱」は漁夫のうたう歌。

さらに次のような作もある。

春夜小集全蘭台侯賦（春夜の 小集 蘭台侯と全しく賦す）

君門桃李足平生 君門の桃李 平生足れり

白雪俱飄無世情 白雪 俱に飄りて 世情無し

珠履三千應上客 珠履 三千 応に上客なるべし

瑤篇十五自連城 瑤篇 十五 自ら連城

論心玉軫依花影 心を論じて 玉軫 花影に依り

握手春宵坐月明 手を握って 春宵 月明に坐す

曲就青山歸未得 曲就りて 青山 歸ること 未だ得ず

憐余早晚避時名 憐れむ 余 早晚か 時名を避けん

（同上、巻中）
 「白雪」は琴曲の名。「珠履」は珠飾りのくつ、貴戚の珠遇を受けること。「上客」は上等の客。「瑶篇十五」は見事な作品。「連城」は多数の城、無上の宝に相当する意。「玉軫」は玉の琴柱。「握手」は手をとって親しむ。「早晚」は早かれ遅かれ。「時名」は名声。
 また、次のような作もある。

贈猗蘭臺主人（猗蘭台主人に贈る）

花發上林鴻雁回 花發きて上林鴻雁回る

朱絃無恙倚蘭臺 朱絃恙無くして蘭台に倚る

此音不信人間有 此の音信せず人間に有ることを

看自五雲天上來 看よ五雲天上より來たるを

（同上、巻下）

「上林」は天子の庭園。「鴻雁」は渡り鳥の雁。「朱絃」は煮て柔らかくした朱色の絃。それで演奏すると、「人間」俗世間にあるとも思えない音がした。その証拠に、「五雲」五色の雲が「天上」から來たという。色の変化で吉凶を占う。

さらに徂徠も、西台侯を客として迎えることもあった。

物徂徠邀西臺侯賦呈（物徂徠西台侯を邀う賦して呈す）

梁園綵筆漢詞臣 梁園の綵筆漢の詞臣

昔日金莖映掌新 昔日金莖掌に映じて新なり

直置名山絃不廢 直置名山絃廢せず

還來五馬解音人 還つて來す五馬音を解する人

（同上）

「梁園」は漢代に梁孝王が造営した兔園で、文人を多く集めて会遊した。「漢の詞臣」は司馬相如のイメージで、徂徠をたとえる。「綵筆」

は五色の軸の筆。「金莖」は天露をうける盤を支える銅柱。漢の武帝が仙薬をつくるのに用いた。「直置」は助字としての用法。「名山」は書庫。「五馬」は太守の異称で、西台侯を指す。この人は「音を解する人」でもあった。

「鏡法兄を慈眼山に訪う」には、こう詠まれている。

一曲瑶琴響壁間 一曲の瑶琴壁間に響く

秋風吹動伯牙山 秋風吹き動かす伯牙の山

藤蘿只在雲深処 藤蘿只だ雲の深き処に在り

不是同人不敢攀 是れ同人にあらざれば敢えて攀じず

（同上）

「瑶琴」は玉の飾りを加えた琴。「伯牙の山」は、伯牙・鍾子期の高山を指す。これを読むと、鏡法兄は紛うかたなき琴人だったろう。

最後に「偶作」を見よう。

花零深樹掛啼鵑 花零ちて深樹啼鵑を掛く

三月春寒雨似烟 三月春は寒し雨は烟に似たり

非爲知音容易遠 知音の容易に遠きが為に非ず

高山本自絶朱絃 高山本と自ら朱絃を絶つ

（同上）

「啼鵑」はホトトギス。晩春に凄まじい声で鳴く。転句以下は難解ながら、「知音」が近くにいないからという理由ではなく、「高山流水」はもともとそう簡単に理解できるものではないということではなからうか。

4

本多忠統の『猗蘭台集』巻二には、「和商丘丈人白山雜詠六首」（商

丘丈人が白山雑詠に和す六首）が載り、その第一に次のような作がある。「商丘丈人」は安藤東野（一六八三〜一七一九）の号。

隣君時未老 隣む君時に未だ老いざるに

卜宅鳳城陰 卜宅 鳳城の陰

標自青山拔 標は青山より抜き

心應白雪深 心は白雪の深きに応ず

桂叢侵酒色 桂叢 酒色を侵し

明月動詩吟 明月 詩吟を動かす

高調知難和 高調 和し難きを知る

牀頭綠綺琴 牀頭 緑綺の琴

（『詩集日本漢詩』第十四卷、汲古書院、一九八九年）

「卜宅」は居所を定めること。「鳳城」は江戸城。「桂叢」は月宮。そして「牀頭」には「緑綺の琴」があった。

「白山雑詠」は『東野遺稿』には八首が収まり、忠統が見たときから二首増えている。その第一は、こう詠まれている。

不知玄渚釣 玄渚の釣を知らず

結宇白山陰 宇を結ぶ 白山の陰

三徑酒家熟 三径 酒家熟し

四隣花木深 四隣 花木深し

農桑從客告 農桑 客の告ぐるに従い

詩句答蟲吟 詩句 虫吟に答う

世路悠何限 世路 悠かにして何ぞ限らん

生涯緑水琴 生涯 緑水の琴

（卷上、寛延二年刊）

「玄渚」は江中の洲渚。「結宇」家を構える。「三径」は世俗を離れた

ひとの庭の三本の道。漢の蔣詡の故事による。「四隣」は近隣。「世路」は処世の道。白山に隠退した東野が「生涯」を「緑水」という琴曲に寄せて歌っている。これを見ると、東野は琴人だったろう。

5

山県周南（一六八七〜一七五二）は初期の徂徠門下で、萩藩校明倫館の祭酒となつて滝鶴台（一七〇九〜七三）らを育てた。江戸遊学中の詩に、次のようなものがある。

墨水泛舟作并序（墨水泛舟の作并びに序）

丁未中元邀物先生、泛舟於墨沱河、子遷・子和諸友咸会。会者十余人。多挾蔡伯喈・桓叔夏之技。絃箏交奏、觚翰更命。僕婦

期近逼。恐再会難繼。乃不能無索居睽離之思云。（丁未中元、物先生を邀え、舟を墨沱河に泛かぶ。子遷・子和諸友、咸会す。

会する者十余人、多くは蔡伯喈・桓叔夏の技を挾む。絃箏交こも奏し、觚翰更るがわる命ず。僕、帰期近逼す。再会の継ぎ難きを恐る。乃ち索居睽離の思い無きこと能わずと云う。

鼓楫龍山阿 楫を鼓す 竜山の阿

張樂墨沱河 樂を張る 墨沱河

焱赫行蕩滌 焱赫 行ゆく 蕩滌す

沈瀼揚滄波 沈瀼 滄波を揚ぐ

飛觴稱逸興 飛觴 逸興を称し

笙鼓棹棹歌 笙鼓 棹歌を佐く

秩秩賦既醉 秩秩として 既醉を賦し

僊僊且婆娑 僊僊として 且つ 婆娑たり

歡樂在今日 歡樂 今日に在り

如此良辰何 此の良辰を如何ん

譬彼隴上雲 彼の隴上の雲に譬う

一去竟蹉跎 一たび去りて竟に蹉跎たり

平生幾歲月 平生幾歲月ぞ

常苦別離多 常に別離の多きを苦しむ

一爲參與商 一たび参と商と為らば

此遊夢中過 此の遊夢中に過ぎん

〔周南先生文集〕卷二、宝曆十年刊

「丁未中元」は享保十二年七月十五日の佳節。「子遷・子和」服部南郭と平野金華をはじめ物門の俊秀が徂徠を迎えて、隅田川で舟遊に興じたときのことである。「蔡伯喈」は後漢の蔡邕の字で、善琴者。「桓叔夏」は晋の桓伊の字で、笛の名手。「桓伊三弄」で知られ、王徽之が面識のない桓伊に笛を奏するよう頼み、桓伊は三曲を奏して去ったという（『晋書』桓伊伝）。徂徠門下の人々もここでは琴や笛を演奏して、「絃筚」弦と管楽器で合奏し、「觚翰」詩文を綴った。「焱赫」は猛暑。「蕩滌」は洗い清めること。「沈瀼」は夜気、露、仙人の飲み物。「索居」孤独に離れて暮らすこと。「睽離」は背き離れること。「隴上の雲」は六盤山の雲。「参商」は星座の参宿（オリオン座の三つ星）と商宿（さそり座のアンタレスを含む三つ星）のように離れ離れに出会うことがないさま。

さらに「竹溪輿平翁、與大學生倉君有贈酬、示余要和」（竹溪輿平翁、大學生倉君と贈酬有り、余に示して和を要む）と題して、こう詠んでいる。前後を省略して引用する。

竹溪逸叟顔如玉 竹溪逸叟顔玉の如し

朱紘一奏舞皇娥 朱紘一たび奏して皇娥舞う

變調更度清商曲 変調更に度す清商の曲

天際黯淡哭鬼魔 天際黯淡として鬼魔哭す

（同上、巻一）

「竹溪」が三浦竹溪（一六八九～一七五六）ならば、「竹溪尤も志を經濟に留む。律学に精し」（『先哲叢談』後編巻五）と言われている。「皇娥」は少昊の母。「清商」は音律の商の音。澄んだ音色。「鬼魔」悪魔さえ哭したとすれば、竹溪は超絶技巧の持ち主だったか。「寄題流水園贈瀧彌八」（流水園に寄題して、滝弥八に贈る）にはこうある。

聞君開園川上枕 聞く君園を開いて川上に枕すと

高山流水繞君園 高山流水君が園を繞る

君家古琴稱大雅 君が家の古琴大雅と称す

高山流水入琴心 高山流水琴心に入る

君不見伯牙絶弦子期死 君見ずや伯牙弦を絶ちて子期死すを

空古人間少知音 空古人間知音少なり

自鼓自歌君自和 自ら鼓し自ら歌って君自ら和せよ

高山流水遺響深 高山流水遺響深からん

（同上、巻一）

鶴台の「流水園」は文字通り「高山流水」がその周囲を取り巻いているようにだ。そこに「大雅」という名の「古琴」があった。しかし伯牙・子期の例をひくまでもなく、「知音」は少ない。そこで師のすすめは、自分で演奏し、自分で歌って、自分で琴と歌を「和」合わせれば、「遺響」は深く響くだろうというもので、これは琴人でなければできないことである。

また次のような作もある。

訪江山人於嵯峨不逢（江山人を嵯峨に訪ねて、逢わず）

洛中耆舊徧相尋 洛中の耆旧徧なく相い尋ぬ

聞道嵯峨人鼓琴 聞道きくならく嵯峨の人琴を鼓すと
流水青山秋欲老 流水青山秋老いと欲す
衡門昼鎖白雲深 衡門昼鎖とくす白雲の深きに

（同上、巻四）

「江山人」入江若水（一六七一〜一七二九）は摂津の酒造家で、鳥山芝軒に詩を学び、徂徠とも親交があった。「耆旧」は昔馴染みの老人。「嵯峨の人」すなわち若水が「琴を鼓す」ということを周南は聞いたのである。

6

高野蘭亭（一七〇四〜五七）と横谷藍水（一七二〇〜七八）の二人には失明という共通点があり、師弟の關係にあった。蘭亭の父は幕府御用達の魚問屋を営むとともに、百里と号する嵐雪門下の俳人でもあった。本人は荻生徂徠に入門後、十七歳で失明したために詩人になるよう勧められ、服部南郭と並称されるまでになった。一方の藍水は、痘が原因で六歳のときに失明し、はじめ鍼医を業としていたが、服部南郭の講義を聴いたのをきっかけに、十七歳で蘭亭について詩を学んだ。

そこで、まずは蘭亭の詩から見てゆこう。「越君瑞」は幕府医官の越智雲夢（一六八六〜一七四六）で、徂徠に師事しつつ、主治医として師の脈も取ったが、徂徠はその診断に容易に従おうとしなかったらしい（前掲、平石氏『荻生徂徠年譜考』一六五頁）。

雪中懷越君瑞松月館（雪中、越君瑞の松月館を懐かしむ）

洞天琳館神門側 洞天之琳館神門の側

中有仙翁坐紫極 中に仙翁の紫極に坐す有り

但見天風吹雪来 但だ見る天風雪を吹きて来たり

* 闕金荃 共一色 * 闕金荃 共に一色

提壺挈榼酌流霞 壺を提げ榼を挈とらげて流霞を酌み

醉來歌出陽春曲 酔い來たりて歌い出だす陽春の曲

陽春一曲綠綺琴 陽春の一曲綠綺琴

絃中高調好誰識 絃中の高調好きこと誰か識らん

（後略、『蘭亭詩集』巻二、宝曆八年刊）

「洞天」は神仙のいるところ。「琳館」は道觀。「仙翁」は君瑞を指し、「紫極」は天子の居所に擬える。「?闕」は一字欠。「金荃」は、天から降る露を不老長寿の薬と信じて、それを受ける承露盤を支える銅の柱。「陽春の曲」は琴曲の名。「綠綺琴」は司馬相如が梁王から賜った琴。これは雲夢宅で蘭亭が「陽春」を演奏したのでろうか。というのも、石島筑波（一七〇八〜五八）の『芝荷園文集』にはこう詠まれているからである。

水亭飲呈雲夢越公（水亭に飲む、雲夢越公に呈す）

水亭高樹陰 水亭高樹の陰

向晚好披襟 晩に向かつて襟を披くこと好し

簾捲天河近 簾を捲けば天河近く

杯銜夜月深 杯を銜めば夜月深し

呼童頻剪燭 童を呼んで頻りに燭を剪り

却擘罷彈琴 擘むを却けて彈琴を罷む

相對相忘處 相対して相い忘る処

古人同此心 古人此の心を同じうす

（巻二、明和七年跋刊）

「水亭」は水辺の四阿あやま。「天河」は天ノ川。問題は、「擘を却けて彈琴を罷む」の一句である。「擘」はおそらく蘭亭を指すだろう。闕連して「筑波の間居にして雲夢越公を寄懐し奉る。公、琵琶を好む」（同

上、卷三」と題する作の末句は、次のようなものである。

遥憶真人天際趣 遙かに憶う真人天際の趣
琵琶曲罷月婆娑 琵琶曲罷めて月婆娑

「真人」は、道家で道の奥義を悟り得た人の意で、雲夢を指す。「天際」は天の果て。「婆娑」は影の揺れ動く様子。

次の詩の贈り先「谷文卿」は、横谷藍水の字。

贈谷文卿（谷文卿に贈る）

東都大道紅塵起 東都の大道紅塵起り
牆東避世隱金市 牆東世を避け金市に隠る
憐爾讀書草堂閑 憐む爾讀書の草堂の閑なるを
門外車馬如流水 門外車馬流水の如し
路傍年少何紛紛 路傍の年少何ぞ紛紛たる
閉関獨倚烏皮几 閉関独り倚る烏皮几
抱膝自歌郢中調 抱膝自ら歌う郢中の調
由来高調知音少 由来高調知音少なり
下里之歌和者多 下里の歌は和する者多し
每唱陽春却堪笑 每唱陽春却って笑うに堪えたり
我把朱絃試且彈 我れ朱絃を把り試みに且つ彈ず
此曲弥高和弥難 此の曲弥いよ高ければ和すること弥いよ難し
自古更無同調者 古より更に同調する者無し
千秋白雪至今寒 千秋の白雪今に至るも寒し

〔蘭亭詩集〕卷二、宝曆八年刊

「牆東」は城の牆の東、隱者が世を避けて住んだ地。「金市」は繁華街。「烏皮几」は黒皮の脇息。「抱膝」は膝をかかえる。膝を抱きて長嘯す

るのは、諸葛亮のイメージ。「郢中の調」は俗曲の調子。「下里の歌」は下等な田舎の蛮歌。「陽春」「白雪」はともに琴曲の名。
『藍水詩草』卷一には、次の詩がある。「山子祥」は藤山秋水、高野蘭亭の門人である。

贈山子祥（山子祥に贈る）

霞関隱吏山子祥	霞関の隱吏山子祥
官微落魄何伴狂	官微にして落魄何ぞ伴狂す
暇日耽書能慢世	暇日書に耽り能く世を慢る
傾杯下筆即成章	杯を傾け筆を下して即ち章を成す
有才不調無媚寵	有才調せられざるも寵に媚びること無し
俸錢買酒數空囊	俸錢酒を買いて數しばは囊を空しうす
半醉儵然傲態出	半醉儵然として傲態出で
白眼青天興激昂	白眼青天興激昂す
可憐途窮疲磬折	憐れむ可し途窮りて磬折に疲るることを
奔走塵埃鬢有霜	塵埃に奔走して鬢に霜有り
飛蓋纔逢雨露遍	飛蓋纔かに雨露の遍ねきに逢う
曳裾安得風雲長	裾を曳いて安くんぞ得ん風雲の長きことを
祿食家貧樂菽水	祿食家貧しくして菽水を樂しみ
慈竹成陰春草芳	慈竹陰を成して春草芳し
致身竭力兩相得	身を致し力を竭す兩つながら相い得たり
美名往往稱賢良	美名往往賢良と稱せらる
憶昔護洲遊芸苑	憶昔護洲芸苑に遊び
屠竜逐鹿互壇場	屠竜鹿を逐い互いに壇場
結髮同盟爾獨在	結髮同盟爾独り在り
瓊篇錦牘生輝光	瓊篇錦牘輝光を生ず
功成見嫉反遭患	功成りて嫉まれ反つて患まるるに遭う

豈令薄俗窺行蔵

豈に薄俗をして行蔵を窺わしめんや

積羽沈舟自古爾

積羽舟を沈むるは古より爾り

従他世事似滄桑

従他あれ世事滄桑に似たり

毎値親朋把臂説

親朋に値う毎に臂を把りて説き

脱驂旧恩尚未忘

脱驂の旧恩尚未だ忘れず

更出清琴借爾鼓

更に清琴を出して爾に借りて鼓さしむ

弘絃流水鏘琳琅

絃を払えば流水琳琅に鏘たり

許我知音一人足

我に許す知音一人にして足ると

如此交道非尋常

此の如き交道尋常に非ず

然諾可無感意氣

然諾意氣に感ずること無かる可けんや

悲歌一曲淚万行

悲歌一曲淚万行なり

（安永九年刊）

「霞関」霞ヶ関の「隠吏」にして、「官微」低い官職に「落魄」落ちぶれてとくれば、うだつの上がらないイメージが先行しそうだ。「伴狂」は狂気をよそおうこと。「調」は、召し出すこと。「竈に媚びる」とは実力者にこびへつらうたとえ。「儵然」は、物事にとらわれない様子。「傲態」は人を見下げる態度。「白眼青天」は、杜甫の「飲中八仙歌」に、宗之のこととして、「觴を挙げ白眼にして青天を望めば、皎として玉樹の風前に臨むが如し」とあるのに拠る。「磬折」は体への字に折り曲げること。「飛蓋」は車の掩い。「雨露」は雨のような恵み。「禄食」は官吏の俸給。「菽水」は、豆と水だけの貧しい暮らし。それを「樂しむ」とは、そうしたなかでも親に孝養を尽くして喜ばせること。「慈竹」は、めだけ。慈孝竹ともいう。「憶昔、護洲芸苑に遊び」とは、かつて護園で共に学んだことを指す。「屠竜」は高度であつても役に立たない技術。「鹿を逐う」は、天下を争う。「壇場」は活躍の場。「結髪」は、男子は二十で成人の髪を結うこと。「瓊篇・錦牘」は美しい文章と書簡。「薄俗」は軽薄な俗。「行蔵」は出处進退。「積

羽舟を沈む」は、軽い羽も多く積もれば舟を沈めるように、小事が大

事に至るとえ。「滄桑」は、滄海が桑田に変わるような激しい変化。

「脱驂」は、孔子が知人の死のさいに、そえうまを外して贈った故事

によって、香奩に対する謝意を表す。「流水」は「高山」とともに、

知音の琴曲の名。「琳琅」は玉が触れあつて鳴る音の形容。「鏘」は音

が澄んでいること。「然諾」は、一度約束したら必ず実行する心意気。

「更に清琴を出して」以下は、山子祥が琴人だったことを伝えている。

「秋日偶成、山子祥に示す」にも、

竹林秋色傍茅廬

竹林の秋色 茅廬に傍う

濁酒清琴興有餘

濁酒清琴 興余り有り

自笑病生踈懶甚

自ら笑う 病生 踈懶の甚しきことを

終身無意絶交書

終身 絶交書に意無し

（同上、巻五）

と詠まれているように、二人のあいだには常に「濁酒」と「清琴」があつたようだ。「茅廬」は質素な茅葺きの家。「踈懶」は、自らのものぐさを笑う。末句の「絶交書」は嵇康の「山巨源に与えて絶交する書」

（『文選』巻四十三）を指し、藍水にはその「意」がないことをいう。

「閑居」一首の第一を読むと、藍水も琴人だったことがわかる。

蝶夢閑蘿幄

蝶夢 蘿幄に閑なり

蝸廬倚竹林

蝸廬 竹林に倚る

仙方時自檢

仙方時に自ら檢し

臘酒日長斟

臘酒日に長く斟む

關圍穿丹井

圍を闢きて 丹井を穿ち

爲山出碧岑

山を為して 碧岑を出だす

逍遙風月夕

逍遙して 風月の夕に

坐石好弹琴 石に坐して好し琴を弾ずるに

(巻二)

「蝶夢」は莊子が夢で蝶になった故事によって、自他の違いを忘れた境地をいう。「蘿幄」は、つたかずらの帳。「蝸廬」は小さな家。自宅の謙称。「仙方」は仙薬の処方。「臘酒」は陰曆十二月に醸造する酒。「圃」は畑。「丹井」は仙薬の井。「碧岑」は翠の峰。ここまでは言わば枕詞のようなもので、「風月」自然の美しい夕べには「逍遙」自在に彷徨い、「石」にこしかけて弹琴に興ずるのが、「閑居」の楽しみだった。

続いて「蘭亭先生に贈り奉る」にはこう詠まれている。

鶻冠鳥几對詞林

鶻冠鳥几詞林かつかん対す

濁酒青山総陸沈

濁酒青山総て陸沈す

喪明同病隱偏深

世を慢して忘年の交浅からず
明を喪いて同病隱偏えに深し

一時大海乗桴興

一時大海 桴に乗ずる興

千里長風附驥心

千里長風 附驥の心

見説護洲春草夕

見説く護洲 春草の夕べ

幾操流水託知音

幾たびか流水を操り 知音に託す

(同上、巻二)

「鶻冠」山鳥の尾を付けた隠者の冠をかぶって、「鳥几」黒い机に依るのは、蘭亭を描写したものである。「陸沈」は世俗の中に隠れること。「忘年の交」は年齢差を越えた二人の交際。親密さは失明によってより強められたろう。「桴に乗ずる興」は、孔子の言葉、「道行われず、桴に乗りて海に浮かばん」(『論語』公冶長篇)に拠る。「附驥」は驥尾に付す、蠅が千里の馬の尾に付いて千里を行くように、後進が先輩に付して名をなすこと。「見説」は、聞くところによればの意。

末句は、「流水」の曲を演奏して「知音」に委ねること。

「蘭亭先生を哭す十首」の第二にも琴が出てくる。

病枕常相倚

病枕常に相倚る

悲君夢兩楹

悲君 兩楹を夢みること

耽詩拚短髮

詩に耽り 短髮に拚し

服藥誤長生

藥を服して 長生を誤まる

劍失豐城氣

劍は失す 豐城の氣

琴亡郢国声

琴は亡す 郢国の声

靈牀揮淚處

靈牀 涙を揮う処

不忍作驢鳴

驢鳴を作すに忍びず

「兩楹」は堂の上にある二本の大柱。『礼記』檀弓上に、「予、疇昔之夜、夢坐奠於兩楹之間」とある。「豐城の氣」は、豫章の豐城の地に埋もれていた名劍が光を放って天に現れた紫氣。「郢国」は楚のくに、鄙俗な歌が流行った地。「靈牀」は死者の亡骸を仮に安置する台。「驢鳴」は驢馬の鳴く声。つまらない文章のたとえ。

同じく第十には、「一壑空しく玉を埋め、千秋已に絃を絶す」という一節がある。「絶絃」は言うまでもなく伯牙絶絃の意で、友人の死を悲しむこと。

「草堂謾興六首」は次のように始まるが、第六の最後に「哀絃」が出てくる。

新家藍水北

新たに家す 藍水の北

竹隔隔苔橋

竹隔 苔橋を隔つ

釣渚雲來去

釣渚 雲 來去し

書齋日寂寥

書齋日に寂寥

園荒栽樹早 園荒れて樹を栽うること早く

地僻取泉遙 地僻にして泉を取ること遙かなり

我意還誰解 我が意還た誰か解せん

居貧樂緯蕭 居貧にして緯蕭を楽しむ

(卷二)

号の由来でもある「藍水」の北に転居したさいのこと、「竹隴」は竹のはえた土手。「苔橋」は苔むした橋。「緯蕭」は、荻で箎やもつこの類を編むこと。貧しい暮らし。

第六の後聯のみ引用しよう。

樹暝雲帰岫 樹暝にして雲は岫に帰り

池清月滿庭 池清くして月は庭に満つ

哀絃歌自和 哀絃歌自ら和す

夜坐倒銀瓶 夜坐 銀瓶を倒す

(同上)

「岫」は山にある洞穴。雲の湧き出るところ。「哀絃」は悲しい音楽。募る悲しみには飲酒がせめての慰めになる。「銀瓶」は、酒をいれる銀製のかめ。

「大公達至る二首」は、次のように詠い起こされる。大公達がいかなる人物か不詳。

愛我林棲閣 愛す 我が林棲の閣かなるを

華簪對鹿皮 華簪 鹿皮に對す

「華簪」は立派な冠どめ、役人が用いる。「鹿皮」は鹿の皮で作った隠士の冠。来客は身分の高い侍だったのであろう。第二には、こう詠まれている。

孤扉常不掃 孤扉常に掃かず

一騎遠相過 一騎遠く相い過ぐ

石径深苔滑 石径深苔滑かに

松齋落照多 松齋落照多し

撫琴吾嗒坐 琴を撫して吾は嗒坐す

彈劍爾哀歌 劍を弾じて爾は哀歌す

未盡樽前興 未だ樽前の興を尽くさざるに

歸期欲奈何 歸期奈何せんと欲す

(同上)

冒頭の「孤扉常に掃かず」には、来客を歓迎しない意が込められていたか。その客は遠方から馬に乗ってやって来る身分だった。「松齋」は松林のなかの書齋。「落照」は夕陽。詩人は琴をつまびいて、他のことは念頭にない。「嗒坐」は、あらゆるものを忘却すること。これも琴の効用であろう。ところが客は、「彈劍」劍をたたきながら不平をもらし、あまつさえ「哀歌」なげき歌うのである。末句は、酒を前にして中途半端に酔ったところで、さてお帰りはどうなさいますかという問いかけ。かなり冷たい応対といえる。

次の詩も高貴な来客の場合。

松寥君枉駕草堂（松寥君駕を草堂に枉げらるる）

風流貴公子 風流の貴公子

車騎枉相過 車騎枉げて相い過ぎらる

不赴紅塵陌 紅塵の陌に赴かず

將聽白雪歌 將に白雪の歌を聴かんとす

倒衣涼吹至 衣を倒して涼吹至り

飛蓋夏雲多 蓋を飛ばせば夏雲多し

莫笑松堂小 笑うこと莫かれ松堂の小なることを

琴書對石蘿 琴書石蘿に對す

(同上)

さつきの客と異なり、この「貴公子」は感心にも「紅塵の陌」歎楽街には近づかず、「白雪歌」を聴くために藍水の所にわざわざやって来た。末句は、どうか笑わないでください、「松堂」の狭苦しいのを。「石蘿」は岩上の蔓。

7

古文辞派周辺でもっとも琴人らしい人といえば、沢村琴所(一六八六—一七三九)だろうか。「心疾」氣疲れから精神を病んで彦根藩士をやめ、初め宋学を学び、ついで伊藤東涯に師事し、ついには荻生徂徠の説を喜ぶという経歴の持ち主に、次のような詩があるのがなによりの証左である。

秋夜彈琴二首

醉把焦桐聊自彈

醉いて焦桐を把りて聊か自彈す

古松風定夜方闌

古松風定まりて夜方に闌なり

朱絃一曲千秋淚

朱絃一曲千秋の淚

回首西山落月寒

首を回らせば西山落月寒し

空階明月散清輝

空階の明月清輝を散ず

獨弄孤琴露滿衣

獨り孤琴を弄して露衣に滿つ

流水高山唯自樂

流水高山唯だ自ら樂しむ

何論世上賞音希

何ぞ論ぜん世上賞音の希なることを

(『琴所山人稿刪』卷上、宝曆二年刊)

ほろ酔い機嫌で「焦桐」焦尾琴に向かい、ひとり静かに「彈」ずれば、「古松」に吹いていた風もおさまり、いつしか夜も「闌」更けた。こ

の少し前までは松籟も聞かれただろう。「朱絃一曲」に流した「千秋の淚」には、なにか深い訳があったかもしれない。振り返れば、「西山」には月が落ちかかって、季節は秋から冬に変わろうとしていた。これが第一である。

第二は、「空階」人氣のない物寂しい階段に、「清輝」月の光が散乱している光景から始まる。「獨」に「孤」と畳みかけられた孤独はしかし、清らかな月光に透化されて、それほど強くはない。「衣」をしっかりと濡らした「露」さえも、詩人を温かく包んでいるかのようだ。「流水高山」を弾いて、ひとりで「自ら樂しむ」のは、心の支えでもあったろう。「世上賞音の希なることを」問題にしないのは、そのかみの伯牙の氣持ちに倣ったにちがいない。

「林莊の漫興」八首の第八に、「恨むらくは同病の客、我が醉中の歌を聴くこと無からんことを」(同上)とあるのは、たまに來客があるにしても、琴所の「心の歌」を聴く人はいなかったことを示している。そうしたなかで、「悼亡二首」は痛ましさを極みである。「悼亡」は妻の死を悼むこと。

琴屋無人漏滴遲

琴屋人無くして漏の滴ること遅し

空牀臥誦断腸詞

空牀臥誦す断腸の詞

海棠枝上三更月

海棠枝上三更の月

却似昔年双照時

却つて昔年双び照らされし時に似たり

寂寞春閨夜自長

寂寞たる春閨夜自ら長し

鴛鴦衾冷有余香

鴛鴦の衾は冷ややかにして余香有り

孤眠半覺紗牕下

孤眠半ば覺む紗牕の下

猶向空牀喚孟光

猶お空牀に向かつて孟光を喚ぶ

(同上)

「琴屋」は琴人の家。「人無く」の人は、亡妻を指すこと言うまでもない。「漏」は漏刻、すなわち水時計。時の流れが「遅」く感じられるのは、大切な人を喪った悲しみのせいである。「空牀」は独り寝の寂しいベッド。「海棠」は春の末に、淡紅色の五弁の花をつける。そこに「三更」子の刻の月がかかつて、「昔」妻と並んで見た記憶が呼び覚まされるのである。続く第二の寂寥感もひたすら深い。「鴛鴦の衾」は夫婦がともに睡る夜具。「余香」は残り香。夜半に目覚めた琴人が思わず妻の名を呼んで気づくのは、倍加された寂寥である。「孟光」は後漢の梁鴻の妻で、ここでは妻の代名詞として使われ、「孟光」は「蒙求」巻中）には、夫唱婦随の様子が描かれている。また「陶靖節賛」には、こうある。

沈冥遁世	沈冥世を遁れ
疎放任眞	疎放任眞に任し
樂吾琴書	吾が琴書を樂しむ
守賤安貧	賤を守り貧に安んず
孤松細菊	孤松細菊
緑酒烏巾	緑酒烏巾
清風高致	清風高致
千歳一人	千歳一人

（『琴所稿刪』卷下）

「沈冥」は、ひっそりと。「任眞」は自然のまま。「賤を守り、貧に安んず」はそのまま陶淵明の「貧士を詠ず」其の四に、「貧に安んじ賤を守る者、古えより黔婁有り」に拠る（『陶淵明全集』（下）、岩波文庫）。「烏巾」は隱者の被る黒い頭巾。「清風高致」は琴所の生き方にも通うものがある。積慧明による「琴所先生行状」（『琴所山人稿刪附録』）にも、

内行修潔、芝田氏を喪してより以来、居室靜肅、僧廬の如く然り。（中略）家素より清貧、環堵蕭然として、風日を蔽うに足るのみ。先生、之に処りて晏如たり。夜靜かに月明らかなるに遇う毎に、酒を酌み箏を弾じ、賦詠独坐して、動もすれば天明に至る。

と見るとおりである。

「桜子明の箏を恵むを謝す」には、初めから陶淵明が顔を出している。

昔陶元亮、音律を解せず。唯だ無絃琴を撫して、以て其の意を寄せて曰く、「琴書を樂しみて、以て憂いを消す。夫れ音律を解せず、琴の絃せずして、尚お且つ云々」と。則ち其の樂しむ所以の者は、豈に技の巧拙に在らんや。時に三秋に属す。月は千里に明らか、林亭に酒を把り、兒女傍に在り、酔えば乃ち賜う所を援りて一たび彈ずれば、鏗鏗錚錚として、吟ずるが如く、嘯くが如く、余韻亮亮、多く古松風葉の間に在り。須臾にして魂爽やかに神清く、塵慮淨尽し、超然として万物の表に遊ぶが如し。此の幽賞を得ること、実に君子の恵みに出づ。感荷の情、何れの日か之を忘れん。

（『琴所稿刪』卷下）

「三秋」は秋の三ヶ月。「古松風葉の間」は松籟に混じって聞こえること。陶淵明への言及は「琴書を樂しみて、以て憂いを消す」ことへの共感を示すものに外ならない。琴人の一つの到達点と言えるだろう。

8

琴所の門下に、彦根藩士の野村東皐（二七一七〜八四）がいる。「臥竜歌、龍草廬に贈る」を見れば、早くから龍草廬（二七一四〜九二二）とは知り合っていたようだ。詩はこう始まる。

伏水龍生稱臥龍 伏水の龍生臥竜と称す
 幾年高臥草廬中 幾年か高臥す草廬の中
 當世未逢三顧者 當世未だ三顧の者に逢わず
 向人長説管樂風 人に向かつて長く説く管樂の風
 (『養園集』前編卷一、明和七年刊)
 こうして草廬の「臥竜」の志を知った東臯は、すんで「臥竜歌」を作って贈った。草廬が彦根藩に招聘される前の話である。
 やがて東臯は、次のような詩を作っている。

人日瓊美宅集。得毫字。是日諸子多不至。至者元民伯孔及予三人而已(人日、瓊美の宅の集。毫字を得たり。是の日、諸子多くは至らず。至る者、元民・伯孔、及び予の三人のみ)
 不恨同人少 同人の少きを恨みず
 佳辰興更豪 佳辰興更に豪なり
 柏樽逢握手 柏樽手を握るに逢う
 梅色映揮毫 梅色毫を揮うに映ず
 故舊交無恙 故旧交こも恙無し
 陽春曲自高 陽春曲自ら高し
 莫令巴調侶 巴調の侶をして
 容易和吾曹 容易に吾が曹に和せしむること莫かれ

(同上)

「人日」は陰曆正月七日、七草粥の日。各人、行事があったと見えて参会者はずかに三人だったが、「陽春の曲」を演奏して、「巴調」俗楽が入り込まないようにと注意を忘れない琴人だった。
 「移居六首」には、次のような長文の序が付されている。

余生まれて五歳、主家の難に遭い、先君子に従いて、城中を去る。

北郭藪下の地に寓居すること、十有五年、主家復立するに会いて、城東安清の安養坊に卜居す。其の地、農家多し。且つ山を觀、野を望んで、清幽間適の趣有り。頗る悦ぶ可しと為す。自ら謂えらく、以て身を終う可しと。又十有七年、今歳壬申、城中の長松院の南に帰住す。蓋し城外に在ること三十有二年。乃ち先人の居に復することを得たり。先君子没してより、已に十有四年なり。独り老母の堂に在る有り。悲喜交々集まらざる可けんや。絶句六首、聊か其の情を述ぶ。

こうして見ると、野村家の歴史にも浮沈があったことが知られる。仕えていた「主家の難」はどうすることもできない不幸である。しかし泣き言の類は一切記されていない。ようやく「主家が復立」して「城東」に転居したさいも、恵まれた場所ではなかったろうが「清幽間適の趣」を喜んでゐる。そしてさらに時が経過した三十数年後に、元の「先人の居」に復帰することができた。そのときも手放して喜ぶようなことはしていない。それどころか六首のうちの第五には、

歸來未慣城中客 帰り来たりて未だ城中の客に慣れず
 禮法相看意欲迷 礼法相い見て意迷わんと欲す

(卷三)

と詠んで、久しぶりの「城中」の暮らしに戸惑いを隠していない。そして、第六にはこうある。

風塵此地寄琴書 風塵此の地に琴書を寄す
 數畝新開吏隱居 數畝新たに開く吏隱の居
 幽意未忘三徑趣 幽意未だ三徑の趣を忘れず
 莫教松菊故人疎 松菊をして故人に疎ならしむること莫かれ

「風塵」俗世間の真つ只中に帰つて来て、東臯は「琴書」を対置し、「吏隱の居」にふさわしく「数畝」の畑を「新たに開」いた。「松・菊」は陶淵明所縁の植物である。

そして「琴書」の習慣は晩年まで続いたことが、次の詩から確かめられる。

蕤社

六七弟兄在 六七弟兄在り

窮交老更深 窮交老いて更に深し

風塵拚縦酒 風塵酒を縦にするに拚す

天地睨論心 天地心を論ずるに睨す

共隠烏皮几 共に隠る烏皮几

相憐緑綺琴 相い憐れむ緑綺琴

百年同調足 百年同調足る

敢謂少知音 敢えて謂わんや知音少しと

〔蕤園集〕後編卷二、寛政九年刊

「窮交」は貧しいときの交わり。「烏皮几」黒い皮の脇息。「緑綺」は司馬相如が梁王から賜った琴の名。「同調」は同じ調子、殊に音声の和をいう。「蕤社」の集まりが東臯には心の支えだった。

9

伊東藍田（一七三四～一八〇九）は、荻生金谷（一七〇三～一七六六）や大内熊耳（一六九九～一七七六）に師事した徂徠学派の三代目にあたり、日出藩に仕えた。『藍田先生文集』には、次のような詩がある。

賦知音者誠稀分韻青（知音の者誠に稀なるを賦す、分韻青）

撫琴江上水清冷 琴を撫する江上水清冷

意在高山陵杳冥 意高山に在れば杳冥を陵ぐ
曲闕流雲停不度 曲闕りて流雲停まりて度らず
如何人是等間聽 如何んぞ人は是れ等間に聴く

（初稿卷四、天明五年刊）

「江上」で琴を演奏すれば、「水」は「清冷」清く澄み、「高山」を思いながら演奏すれば、「杳冥」はるかに遠い山が現れる。「曲」が終われば空をゆく「流雲」も停まってしまふ。そのような神秘的な演奏を世間の人は「等間」なおざりに聞き流す。「知音」の人がいかに「稀」であるか、藍田には不思議だった。

そういう人だから、琴人も自ずと集まったのであろう。こういう詩がある。

鈴鷗汀來鼓琴喜賦得寒字（鈴鷗汀、来たりて琴を鼓す。喜びて賦す、寒字を得たり）

楚客朱絃聞得難 楚客の朱絃聞き得ること難し

江山六月夏天寒 江山六月夏天寒し

由來不向侯門去 由來侯門に向かいて去らず

獨爲知音枉作彈 独り知音の為に枉げて弾を作す

（二稿卷四、寛政六年刊）

「鈴鷗汀」は未詳ながら、「侯門」に向かわず、藍田のような「知音」のために「枉げて」わざわざ訪れて、「鼓琴」してくれる人であったことがわかる。学派の三代目ともなると凋落の兆しは覆いがたく、これは致し方ないことである。しかしこと「琴」に関しては、このように違いのわかる人がいたのも伝統の力であろうか。

注

- (1) 山寺美紀子「萩生徂徠の楽律研究―主に『楽律考』『楽制篇』『琴学大意抄』をめぐって―」(『東洋音楽研究』第八〇号、二〇一五年)ほかを参照。
- (2) 拙稿「大潮元皓・売茶翁の旅と文学」(『佐賀県近世史料』第九編第二巻、佐賀県立図書館、二〇一九年)を参照。引用は同書に拠る。
- (3) 拙稿「琴人 龍草廬」(『太平餘興』第一一集、太平書屋、二〇二二年)を参照。

